目次
研究所，その付置された目への期待 1
昭和59年度「一般研究」研究目的紹介 2
The Catholic Church and Non-Christian Religions 5
アメリカにおける仏教学の現状（上） 9
真宗学事関係収集資料一覧 11

大谷大学真宗総合研究所
研究所報
No. 11 1984. 12. 10.

研究所，その付置された目への期待

大谷大学
大学院文学研究科長 鍵主良敬

本学に付置された総合研究所が、真宗をその劈頭にかかげて出発してから、すでに三年余り歳月を経た。その間、その歩みは遅々としているとしても、個々の研究成果はそれなりに積み重ねられつつあるといえるであろう。紀要の発刊等にみられる具体的な業績は評価されなければならぬものと思われる。

しかし真宗を名のって、真実の宗教なるものへの方向を目指さなければならぬことに於いて、自らの存在の場所を確保した総合研究所は、果して今、その設立の趣旨にそいつつあるといえるのであろうか。具体的歩みの始まったその事実の中から、改めて確かめなければならない課題に直面しつつあるように思われてならない。というのは、この研究所が大学に付置されなければならなかったのは、大学が「自分自身を見究める眼を自分自身のうちに確保」（『研究所報』No. 1）する必要があったからであろう。その意味での明析な認識に基づいて出発した当初の志願は学長が開所に当って述べた提言のうちに十分に籠められていたと思われる。それ故にこの課題の指向するところは、絶えず問い直されねばならぬものであろう。

「目は目自身を見ることはできず、指は指自身を指すことはできない」という教説の示唆を待つまでもなく、すべてものはその存在の根幹に何らかの曖昧性を孕まざるを得ない。大学もまたその制約から逃れ得るわけではないのである。それ自体のもつそれ自体の自己矛盾である。

ところがそのような暗さを付置されたものが明確にし、照らし出し得て、目となることができるということは、付置されていることが、単に付属し寄生的な役割しか与えられていないことではないからであろう。大学自体のかかえているさまざまな問題を、かえって付置されたものによって、よくその問題の本質に迫り得るからなのであろう。

いわば真宗総合研究所の存在そのものが、その場処の全体をかけて真宗を問い総合を問うことによって、必ずしも真宗ではなく総合でもない面をもちつつ機能せざるを得ない大学に対して、大学の存在意義を問うことになっているのだと思われる。

長い伝統と歴史に支えられて、それなりの背景を荷負って存在している大学には、それ故にかかえ込まざるを得ないさまざまな課題がある。しかしだからといってそのことの問題性が大学自体として明らかになるものではない。それは、人間が自分自身をもっともよく知るもののように見えながら、その実もっとも自らを知りにくいのと同じなのである。その部分を明らかにするのが研究所だと思う。

以上の意味に於いて、大学に於ける自己確認の目を、大学は付置された研究所に期待せざるを得ないといえる。もっとも知りにくいそれ自身の暗部を、絶えず意識の表層にまで具象化させて、その歩みの是非を確認しなければならないのである。それが、本来的に大学が備えていなければならぬ機能を敢て付置する形で設定した「目」の意味になるのではなかろうか。

＜一般研究＞

昭和59年度「一般研究」研究目的紹介

既報のとおり今年度も、共同研究4件、個人研究2件の一般研究が推進されている。それぞれの取り組まれている研究課題の「研究目的」を紹介する。

＜共同研究＞

『教行信証』章節の共通表示化への研究

研究員
本学教授　幡谷　明
（真宗学）

現在『教行信証』の研究は宗門内に止まらず、盛んになりつつある。現代語訳も次々と出版され、さらに、英訳も出版され、近い将来、独訳、仏訳等の出版も行われると思われる。

また『教行信証』を単に学問の対象としてではなく、信仰の書としても、広く一般の人々に読まれつつあるのが現況である。

このような状況を考え合わせると、『教行信証』の章節の共通表示化ということが必要に迫られていると言える。このことによって『教行信証』がますます公開性を持つものと期待される。

『定本親鸞聖人全集』改訂の時機を迎えている今日、次の改訂版にはぜひ共通表示を記し、世界共通の『教行信証』となることを願うものである。

因にバイブルにおける章節の表示は、13世紀に始まり、16世紀には決定され、その時の表示を全世界共通のものとしている。このことによって、我々がすでに大いなる恩恵を受けていることは周知の事実である。

この『教行信証』章節の共通表示によって、いかなる出版のものを使用しても、簡単にわかることができ、さらに、その表示が論文等において表記されるならば、それらを理解する上でも大いに役立つことであろう。

本年度は主として『定本親鸞聖人全集』改訂と共通表示化の為に必要な資料蒐集と整理を行う予定である。

＜共同研究＞

真宗寺院史料の研究

研究員
本学教授　大桑　斉
（日本仏教史学）

この数年来、文部省科学研究費や市町村史編纂などによって各地の真宗寺院を調査し、多量の真宗寺院史料（古文書・記録・什物）を写真撮影によって収集してきた。仮目録の作成など一応の整理を行ったが、いまだ充分なものとは言えない。また、その内容についての検討は、一部を除いてほとんどなされていない。今回の共同研究はこれらの史料の整理を行い、広く利用出来るようにすること、また、それを通じて、内容検討を行うことを目的とするものである。その具体的な問題は以下のようである。

①名号・絵像など什物の研究：これらは、その筆跡や画法、あるいは裏書などによって筆者、成立年代などの判断がなされてきたが、研究者個々に独自の基準があり、必ずしも共通の、客観的基準が成り立っている訳ではない。すでに収集した多くの名号・絵像類を比較検討することによって、共通の認識による客観的基準を確立したい。

②本願寺発給文書の研究：日本古文書学の中世以降の研究は、主として武家文書を対象として進められてきたため、本願寺の発給する文書については、あまり言及されることがなく、その様式論は不明確な点が多い。しかるに、近年の中世史研究における一向一揆、本願寺論の重要性から、量的にも多い本願寺文書の研究の必要性がいわれている。すでに収集した文書は、こうした視点をも念頭においたものであり、室町幕府の書札礼に準拠しつつ独自の展開をみせたと考えられる本願寺文書の様式論の体系化を試みたい。

③「寺内」研究：すでに収集した文書によって美濃地方

の真宗寺院の「寺内」の性格を明らかにしたい。一向一揆論、中世社会論のうちで、「寺内」は中世日本の自由と平和を示す領域（網野善彦説）であるともいわれ、学界で重要問題となっている。一般史からの「寺内」論においては、その個別寺院の成立事情や「寺内」となった理由、あるいはその後の状況について必ずしも充分な研究がなされていない。この点を究明したい。

④地域と教団の研究：滋賀県マキノ町には三浦講という真宗寺院集団がある。58年夏の調査によって、それら寺院に所蔵される文書・史料を重点的に収集した。これによって、三浦講寺院とこの地域の関係を究明しえるのであり、他地域のそれの原型となる理論が見出せよう。

⑤寺檀制研究：美濃・近江・筑後で収集した史料のうちには多くの寺檀関係文書がある。これを検討することにおいて、寺檀制の実態を究明したい。

以上のように、すでに収集しえている史料によって研究が可能であるが、整理・研究の進展によって補充調査・再調査が必要となることが想定されており、出来れば夏期休暇中に実施したい。

＜共同研究＞

近代文学における仏教的諸相

研究員
本学教授　渡辺　貞磨
（国文学）

「仏教と文学とは、いかにかかわるのか」という課題への関心は近代以前の文芸的諸作品を対象とする研究分野にあっては、近時いちじるしい高まりを見せている。しかし、近代文学に対して、かかる視点よりアプローチするという方法論は、こんにち学界に十二分に定着しているとは認めがたい。

この共同研究は、これまで照射されることの少なかった「仏教は日本近代文学といかにかかわるのか」という課題と取り組み、その具体的な方法論を模索しようとするものである。この目標実現のための第一段階として、昭和五十八年度は、宮沢賢治の諸作品に集中的に取り組んだ。その理由および作業の結果は以下のごとくである。仏教教理と文学とのかかわりを考えるという場合、彼の作品は最も近距離にあるものといえるからである。その結果として、〔A〕①因縁、②法（Dharma）の永遠性、③十界互具といった仏教思想を彼の諸作品の中に指摘し得た。〔B〕これらの仏教思想が彼の作品において、文学として実現されていることを指摘し得た。例えば、従来、比喩として考えられていたものが、彼の作品にあっては、実は比喩ではなく、仏教思想そのものの文学的実現であったことを知り得た。

賢治の作品を検討することによって確認し得た方法論を突破口として、昭和五十九年度は、他の近代の諸作家の作品を研究する。

＜共同研究＞

保育者養成機関における宗教教育の現状と課題

研究員
本学助教授　松村　尚子
（社会学）

家庭の崩壊、青少年の非行等、「社会病理」的現象が多発し、混迷を深める今日の社会にあって、我々は日々の生の営みのなかでよりよく生きることの意味を絶えず問い続けなければならない。確固とした信仰となるにせよならぬにせよ、そのような生の指針を求める際の一契機として、宗教が現代人の生活においてもつ意味は以前にも増して重要になっているといえるであろう。専門的保育者として生きる場合も例外ではありえない。いなむしろ、保育者が、次代を担うべき乳幼児の生命と精神に直接的に関与し、その人格形成のスタートラインにおいて礎を築くことに力を及ぼすものであることを思うならば、保育者自身の生活の質のありようは、さらに重大な意味をもつといえるであろう。そう考えるとき、仏教・真宗の精神に基づく保育者養成を掲げる本学の教育は、何を目ざし、どのようなものでなければならないかの理念的な問い直しは、関係者すべてによって日常的に行われなければならないであろう。と同時に、変容を続ける社会の中で、現実にその理念にどこまで到達しえているかの点検と、将来を見通した具体的な対処の方向性の模索もまた行われる必要があるであろう。

以上のことをふまえて、本研究は次のような問題の究明を目的とする。

1）本学幼児教育科は、そのカリキュラム編成を中心にみるとき、昭和41年の科創設以来数度の「転換」点を経て今日に至っている。その歴史的な展開を辿って、その時々の改変が制度的に何をめざして企画され、いかなる成果を実現しえたかの再検討を行うこと。

2）既に千人をこえる卒業生を世に送っているが、本学における教育が、これまでの卒業生及び在学生に対してその生活態度や保育観の上に何をもたらしえたか、えなかったかについて調査検討を行うこと。

3) 科創設当時から継続的に学生の実習を委託してきた園側指導者からの本科学生に対する期待・評価の如何を問うこと。
4) 本学幼児教育科における仏教教育が、日本及び諸外国を含めた世界史的な視野においてどのように位置づけられるかの確認を行うこと。

以上の目的にかんがみ、本研究は教育学・社会学、心理学等多角的なアプローチによって本学幼児教育科の仏教教育の現状を考察し、さらには今後の望ましいあり方に関しての模索と提言を試みようとするものである。

＜個人研究＞

ツォンカパ造『了義未了義論善説心髄』の解読研究

研究員
本学助教授　片野　道雄
（仏教学）

チベット仏教者ツォンカパには仏教学概論とも言うべき主著『了義未了義論』（Drań pa dań ṅes pa'i don rnam par 'byed pa'i bstan bcos legs bśad sñiṅ po, Otani Nos. 6142, 10103, 10132, 10135, Toh. No. 5396, Tokyo Nos. 41, 42）がある。現代のチベット人学僧にとっても仏教学習のテキストの一つとして主要なものとせられているのであるが、この文献は、本学所蔵の北京版西蔵大蔵経を始め、いわゆる蔵外資料群に多種伝承され、また、注釈書も多い。本学に所蔵する注釈書としては 'Jam dbyaṅs bźad pa'i rdo rje Ⅰのもの（Otani No. 11552, ct. Otani Nos. 13967, 13968），Sle luṅ bźad pa'i rdo rje のもの（Otani No. 10971），その他 Nos. 11986，11997などが知られる。

近年文部省科学研究費のもとで、このテキストを中心とする諸資料について些かの解読研究を進める機会に恵まれた。その成果の一端として、この文献は、ツォンカパの仏教邂逅、インド仏教受容についてはもとより、チベット仏教における大乗仏教の展開を解明する上にも重要な指針をもたらすであろうことが知られるに至った。

本研究においては、これまでの研究成果を吟味検討しつつ、テキストの全容にわたって、より正確な文献学的な解読研究を推進したい。この研究は、すぐれたチベット人学僧の協力を得て進めるものであり、更には、本学に所蔵する厖大な蔵外文献類の解明にも一助となるものである。

＜個人研究＞

ゲーテの『ファウスト』研究—『ヴァルプルギスの夜』について

研究員
本学教授　岸　繁一
（独文学）

ゲーテの『ファウスト・第一部』後半、グレートヘン悲劇中に「ヴァルプルギスの夜」と「ヴァルプルギスの夜の夢」の場面がある。グレートヘン悲劇はすでに初稿『ウルファウスト』（1770—5）制作時に書かれ、その中心をなしていた。「ヴァルプルギス」両場面は完成時（1808）にはじめて書き加えられた。グレートヘンはすでに身籠り、罪意識にさいなまれ絶望の極に達した「寺院」の場面と嬰児殺しの罪で牢獄に繋がれている彼女を救い出そうとファウストが決心する「曇れる日」の場面との間に挿入されたのである。筋書の上から見れば、ファウストはグレートヘンを手に入れるために偽証をしたり、彼女の母を死に至らしめ、彼女の兄を決闘で仆した。当然罪意識に目覚めるところをメフィストに誘惑されてブロッケン山に集まる魔女たちの悪の世界、逸楽と放縦の生活へ曳きずり込まれる場面である。制作年代的には「ヴァルプルギスの夜の夢」はもともと「オーベロンの金婚式」として当時の文壇風刺を目的として1797年ころ書かれ、『ファウスト』とは無関係であった。「ヴァルプルギスの夜」の構想は初稿時代にまでさかのぼる形跡を持っているが、直接にはゲーテがミルトンの『失楽園』を読み、その中に描かれた悪魔世界の位階序列の全体図を見て『ファウスト』に応用しようとして発想したのである。特に後者の決定稿以前の構想を伺わせる「補遺」には猥雑極まりない逸楽が充満し、身の毛もよだつような悪魔世界、魑魅魍魎のただよう妖気の世界であったらしい。たとえば最後には「燃えさかる大地に裸体の女性像が見える。両の手をうしろ手に縛られている。……首が切り落される。血が迸りでて火は消える。夜、風の音。」女性像はグレートヘンをおもわせ、幻影は来たるべき処刑を予告している。しかし決定稿では処刑の幻影も色蒼ざめた美しい少女が両足を鎖で縛られて歩いて行く姿に変えられている。悪魔世界も半ば抹消されている。そればかりか本来『ファウスト』と関係のない「オーベロンの金婚式」が間奏曲として「ヴァルプルギスの夜」に続いている。筋の脈絡から唐突な印象を与える。それ故両場面相互の関係および両場面が作品全体の中でどのような意義を持っているかを考えてみたい。

『海外仏教研究』研究会報告
日時：昭和59年2月29日(水)
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

The Catholic Church and Non-Christian Religions

本学非常勤講師
嘱託研究員　リノ・ベリーニ
Lino Bellini

For two years, the Shin Buddhist Comprehensive Research Institute has been working on a project aimed at the understanding of the current ways in which Buddhism is studied in America and Europe. Up to this time only the efforts made by universities and academic institutions have been taken into account. Therefore it could be useful to have some insight about other ways in which Buddhism is being studied and appreciated in western countries.

In this short report, I would like to point out some of the reasons for the particular interest of the Catholic Church toward other religions in general and Buddhism in particular. As it is well known, for many historical reasons, Christians have been interested in Buddhism for many centuries. Many of the western disciplines interested in Oriental Studies have been started or cultivated by missionaries or Christians (*cf.* De Lubac, *Le rencontre de Bouddhisme et de l'Occident*, Paris: 1952). But as it is also known, the history of such encounters has not been without limits, mistakes, and misunderstandings. In more recent times, however, the problem of the relationship with Non-Christian religions is becoming one of the major themes of reflection in the Church. In this respect, the most meaningful event has been the Second Vatican Council which is at the base of the recent attitude of the Church towards the modern world.

The central document which embodies the Vatican Council's views on this subject is *Nostra Aetate* ("In Our Time") but its teachings are complemented by several other documents of the Council and other publications. One of the major statement of this document says:

> "The Catholic Church rejects nothing of what is true and holy in these religions. It has a high regard for the manner of life and conduct, the precepts and doctrines which, although they differ in many ways from its own teachings, nevertheless often reflect a ray of that truth which enlightens all men." (*NA*, 2)

The document continues with separate treatment of Hinduism, Buddhism, Islam, and Judaism and concludes by urging Christians to enter with love into dialogue and collaboration with people of other religions.

> "Let Christians, while witnessing to their own faith and way of life, acknowledge, preserve, and encourage the spiritual and moral truth found among Non-Christians, also their life and culture." (*NA*, 2)

This document was preceded and followed by other documents at different levels, such as:

— Breve,*Progrediente Coucilio* (1964)

— The Encylical Letter *Ecclesiam Suam* (1964) by Paul VI

— Constitution *Regimini Ecclesiae* (1967)

— Apostolic Exhortation *Evangelii Nuntiandi* (1975)

— Encyclical Letter *Redemptor Hominis* (1938) by John Paul II which strenghtened and enlarged the foundations and imperatives of dialogue.

According to the former document, the world-religions are "a wonderful patrimony of the spirit of Man"; express "the tension of makind in search for God and the full meaning of life"...; therefore, the Church approaches world-religions with respect, esteem, discernment, "destroying nothing" because the conversion to which she is calling is due to the Holy Spirit, and it is not an alienation but "a deepening of personal identity..."

— The most recent and comprehensive document is entitled "The Attitude of the Church Towards the Followers of the Other Religions: Refections and Orientations on Dialogue and Mission" and is the result of a lenghty project which was begun in 1979. This document was published in the *Osservatore Romano* (June 11-12, 1984) and was published is six languages in the *Bulletin* of the Secretariat for Non-Christians. A Japanese translation is also being prepared.

This document is paticularly important because, in addition to being intended for the local Catholic Churches of different countries as an instrument of reflection, it also tries to clarify to the followers of other religions how the Church views them and how it wants to behave toward them.

Documents like these are sufficient to show that there is a rapid growth of consciousness in the Catholic Church concerning the religious tradition of the world. Moreover, these documents have been followed by several practical initiatives not only in Europe but also in Asia. (Up to now in Asia there are more than sixteen Christian centers for research and dialogue.)

At an international level the most meaningful event was the institution of The Secretariat for Non-Christians by the Vatican in 1964. This organization has three main aims:

1. Outside the Church — To open friendly relations, communications and dialogue with followers of the religious traditions of the world. These would include personal relations, official relations, community relations, grass-root-level relations, academic relations...all in a spirit of love, service, hospitality, in mutual sharing, and with social and cultural collaboration.

2. Inside the Church— to arouse interest in and promote knowledge of the followers of the Non-Christian faiths, to stimulate dialogue and communication with them, "in order that Non-Christians come to be known honestly and esteemed justly by Christians."

3. To be attentive and helpful in the ongoing process of inculturation between the Christian message and the religious cultures of the particular places.

"In a word," wrote the late secretary P. Rossano, "we consider ourselves, within the Church, as the advocate, and the defenders of others as such, namely of their rights, their spiritual values, their religious tradition and identity."

During the past twenty years and especially since 1973, the Secretariat has held meetings in more than thirty nations with representatives of the various religions. In the first years of the Secretariat, books were also published on dialogue and about religions especially for Christian students of theology. (A small but precious book on Buddhism was prepared by the Catholic priest E. Lamotte, well known in the Buddhist world, who was a member of the Committee of the Secretariat.)

In collaboration with other Christian Churches, stable relationships were established with many religions. In Japan, cordial and sincere relationships were developed during this time with many religious groups, be they Shinto, Buddhist, or from New Religions. A complete report of the progress of such initiatives can be read in the issues of the *Bulletin* of the Secretariat which began publication in 1966.

The most important thing for future progress is the fact that, little by little, this new practical and theoretical interest of the Church towards other religions has clarified its aims and methodology. Quoting from the last document (*N.* 3):

> "This new attitude has taken the name of DIALOGUE. This term, which is both the norm and ideal, was made known to the Church by Paul VI in the encyclical "*Ecclesiam Suam*" (August 6, 1964). Since that time, it has been frequently used by the Council as well as in other Church teachings. It means not only discussions, but also includes all positive and constructive inter-religious relations with individuals and communities of other faiths which are directed at mutual understanding and enrichment."

One could assert that in this field the Catholic Church has been influenced and attracted by the so-called *Dialogisches Denken* or *Neues Denken. Neues Denken* developed in Europe against the background of existentialism and personalism, in reaction to various forms of positivism, idealism, individualism or collectivism. (It is enough to quote the names of Buber, Cohen, G. Marcel...together with Christian Theologians like Brunner, Barth, Guardini, Rahner... .) The Church was certainly enriched by this stream of thought with new attitudes and a new awareness.

Based on these premises, DIALOGUE has become an experience of inter-religious sharing which may go deeper than a simple, even if reciprocated, academic sharing. DIALOGUE can become a real way of new relationships and mutual enrichment as it was never experienced during the past centuries.

Here it is not possible to analyze the distinctive features of such DIALOGUE, but some of the elements are:

— the problem of the consciousness of the *identity* of the interlocutors

— the total and sincere *respect* for the other together with a true knowledge of his faith

— a sincere *receptivity* and *reciprocity*

— the consciouseness of sharing *common values*

— the need for *patience* and *gradualism*

— the need of a dialogue always effected in *actuality*, etc...

The second chapter of the document on the "The Attitudes..." (No. 20–35) presents also a wide reflection on some important and typical forms of dialogue. Among them are: the dialogue of life for all, the dialogue of deeds for working together, the dialogue of specialist for understanding, and the dialogue of religious experience.

Perhaps, it is not necessary to recall that such a dialogue, if only in its beginning, is not only a hope for the future but already a fact in many nations of Asia. For reference, together with the *Bulletin* already mentioned, it could be useful to consult the issues of *Inter-Religio*, published by Nanzan Institute for Religion and Culture, as a network of Christian organizations for inter-religious encounter in Eastern Asia. For many reasons Japan seems to have a leading role in this encounter:

In addition to the official contact among religions it is well known that there is an empathy between Zen and Catholic religious life in both Japan and in Western countries. As for the dialogue of specialists, together with the Christian NCC Center of Kyoto which has played a pioneering role in this field, we should also remember the Catholic institutions like Sophia University Institute for Oriental Religions (with many publications); Nanzan Institute for Religion and Culture, which has been instrumental in introducing Japanese Religious thinkers to western countries and many Japanese scholars of Religious Science. Among them are Soga Ryōjin, who had one of his lectures published in the last issue of *Japanese Journal of Religious Studies.*

Many other events and initiatives should remembered including the increasing number of Christians (priests, religious, and lay) who are working in the field of Buddhist Studies and dialogue. Since the Christian Churches are deeply rooted in many countries of the world, this type of dialogue will lead to a greater awareness of other religions among ordinary Christians and may become one of the main ways in which Buddhist tradition becomes known and appreciated in the West.

Many other things could be said on this opportunity; however, at the end of this very limited report I would like to express a hope. Dialogue, at least in East Asia, seems to be mostly the initiative of Christians, and seems to be carried on largely by non-Asians. A part form the many reflections which could be made about this topic, it is evident that this constitues a major limit of the dialogue in itself. There is a great need that initiatives be taken by religions other than Christian. Could not this leading role in dialogue be one of the aims of the Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute?

Many problems are yet to be solved, but it is clear that, in the difficult world in which we have to live before the twenty-first century begins, dialogue can become a source of hope and a factor of communion in mutual transformation.

『海外仏教研究』研究会報告（要旨）
日時：昭和58年6月29日（水）
場所：研究所会議室

〈指定研究〉

アメリカにおける仏教学の現状（上）

京都産業大学
教　　授　一郷正道

ほとんど各州のどこかの大学で、毎週一度か二度は専門課程あるいは一般講義において、仏教が講義されていること、ミシガン大学のある人口約十万の町においてさえ、インド、チベット、中国、韓国、日本の各種の仏教の市民のグループ活動が存在すること、この二点が現在のアメリカにおける仏教学乃至仏教信仰の現状を端的に示しているといえよう。かかる現状をもって仏教が質量ともに充実しているかどうかを判断することは別問題にして、この現状を将来した契機を回顧し、現状の分析ならびに課題をみることにしたい。

その契機として二つのことがらを挙げることにしよう。一つは一八九三年にシカゴで開かれた世界宗教会議（The World Parliament of Religion）、二つには一九五八年以降の Crash Programme による影響である。

まず、世界宗教会議が開催された前後の動静を Rick Fields の *How the Swans Came to the Lake,* Shambhala Boulder 1981, に依って追ってみる。

アメリカ人が初めて Skt. の文献に接したのは、カーリダーサの『シャクンタラー』によってである。長くインドに滞在し The Asiatic society を設立した W. Jones が英訳した『シャクンタラー』がボストンの The Monthly Anthology and Boston Review 誌に掲載されたのは一八〇五年のことであった。この英訳がアメリカ人にインド文献への目を向けさせたのみならず、その独訳はゲーテを大いに感銘させたという。『シャクンタラー』から四十年経て『バガバッドギーター』がボストンで発行されていた The Dial 誌に登場する。さらに、同誌は一八四四年にEthnical Scripture という特集号で『法華経』の英訳を掲載する。この訳はビュルヌフの『インド仏教思想入門』からの重訳であったが、『法華経』が初めて英語世界に登場したことになる。同誌の編集者 R.W.Emerson は『バガバッドギーター』を「仏教に関する名著である」と評したりしていたものの、産業主義の時代背景の中、同誌をとりまくグループは、古代ギリシア、中国、インド世界の文化、宗教に自分たちにないものを求めていった。

このグループに関係する E.Arnold が一八七八年に *The Light of Asia* を著わし爆発的な売れゆきを示すことになった。本書は、ブッダの話と仏教思想の概説から成っていて、ここに初めてアメリカ人が、仏教に接することになったといえる。アーノールドは、S・ハーディ、M・ミューラー、S・ビールといった学者たちの業績をもとに仏教の解説をおこなったのであった。

また、一八八〇年には、ランマンがハーバード大学でサンスサリット語学の講議を始めている。

以上は、アメリカ東部におけるインド文献あるいは仏教との出合いの話である。一方西部においては、一八四八年のサンフランシスコ北方でのゴールドラッシュが、仏教との出合いをもたらす。ゴールドラッシュに伴ない一八五三年には中国人が移住し、中国人のための中国寺が建立される。それによって初めてアメリカ大陸に、釈迦を始め阿弥陀、薬師、大日、文殊、弥勒、観音等の仏像がもたらされる。この中国寺は、道教、儒教、仏教の混合ではあったが、信仰の中心は浄土教にあったとされる。

因みに、日本人の動静は、西海岸にもまだ伝わらず、一八六八年（明治元年）にハワイへ渡っていたにすぎない。ハワイに本願寺の別院が建てられたのは一八九六年のことである。

アメリカ本土と日本との仏教史上の関連を敢えて見出そうとするならば、セイロンでパーリ語を学んで帰国した釈宗演のもとに、一八九三年シカゴで開催される世界宗教会議の招待状が寄せられたことであろう。

ここでもう一度、東海岸の情勢に注目する。後にボストン美術館々長になったフェノロサは、動物学者モースとともに来日し、東京帝国大学でヘーゲル哲学を講じた。来日するや、日本美術に深い造詣を示し、法隆寺の夢殿を開扉させ、多数の美術品を蒐集し持ちかえった。帰国後、美術館長として世界宗教会議の手伝いをするとともに大乗仏教の宣伝に大いに活躍したのである。一八九四年、リス・デヴィズがボストンを中心に六週間にわたって仏教の連続講義をおこなったが、それは、パーリテク

ストと長老派仏教こそが仏教の純粋な思想であり、大乗仏教は後世の堕落した形態であるというものであった。これに対してフェノロサおよびビゲローは、リス・デヴィズの学識を認めながらも、仏教は、思想的に進歩発達していること、一人だけの救済を説くものではないこと、等を強調し、大乗仏教の立場を擁護したのである。そして、そのビゲローは、一九〇八年になるとハーバード大学で仏教の講義を開始した。

このようなアメリカ大陸の状勢の中、一八九三年にコロンビア万博の一環として、シカゴで世界宗教会議が開かれた。様々なキリスト教々義を一本の線に統一したいという願いのもとに開かれたが、結果として、科学と宗教間のギャップに対する対応をめぐり仏教とキリスト教との相違をはっきりさせることになった。

この会議に日本の代表者として参加した釈宗演と作家ポール・ケーラスとの出会いが、ただちに鈴木大拙の渡米という歴史的事実をもたらした意味で忘れることのできない重要なできごとであった。

ポール・ケーラスは、ドイツ移民で、宗教や科学に関する書物をよくよみ、*The Gospel of Buddha* なる書物を著わしていた。この書は、オルデンベルグからは批判されたものの、大拙からは「極めて学問的でもなく低俗にも堕さず中間的な仏教書」として評価された。また、ケーラスは、仏教思想の紹介ならびにアメリカ人とアジア人とのコミュニケーションの場として雑誌を発行もした。今後の社会には仏教が相応しいとの見解のもとに、東洋思想に関する著作の翻訳・編集の仕事を企て、釈宗演に協力を要請する。円覚寺の管長就任がきまっていた釈宗演は、その任に鈴木大拙を紹介し、一八九七年に大拙の渡米とつながった。ケーラスのもとでの大拙の最初の仕事は、『道徳経』の英訳であり、つづいて『大乗起信論』、さらには *Outline of Mahayana Buddhism* の出版となった。

このように、大拙の渡米は、単に禅の布教を目的にしたものではなかった。たとえば、今は亡きエドワード・コンズは、若き頃マルキストであったが大拙の書物との邂逅によって仏教徒に転向した。そのコンズの著わした仏教に関する書物が、どれだけ多くの西欧人に影響を与え、どれだけ多くの仏教学者を誕生させたかを思うとき仏教思想伝播という面での大拙の果した大きな業績を今一度確認せねばならない。この意味でも世界宗教会議の意義を再評価することができよう。

この会議がおわってしばらくして日本の仏教伝道使節がサンフランシスコに到着したが、それは一八九八年のことであった。本願寺の最初の別院ができたのは、その翌年一八九九年である。

以上が、アメリカが仏教に接していった初期の動静である。次に、近年の動向の中で、忘れてならないものとして Crash Programme の成立をあげることができよう。

一握りの私立大学のみでおこなわれていた非西欧文明研究（Non-western Civilization Studies）が、公立の州立大学へ普及したのは、第二次大戦後のことであった。とりわけ、朝鮮戦争を通じて中共と戦い、さらにヴェトナム戦争。その上、スプートニク打上げにより宇宙開発戦争でソ連に一歩後塵を拝したことが、皮肉にもアメリカにおける東洋学発展の大きな契機となった。

ソ連に対する敗北感を払拭すべく生まれたのが Crash Programme であった。このプログラムは The National Defence Educational Act（NDEA）として具体化し、科学と外国語研究に莫大な予算が計上されることになった。科学の分野はさておき、研究強化対象となった外国語は、中国、ロシア、日本、アラビア、ヒンディー、ポルトガルの各語であった。これら語学の研究に携わる学生に多量のスカラーシップが支給された。その結果、自ずと多くの学生が、東洋学研究を志向するようになり、アジア各地へ多くの留学生が派遣されることになったわけである。

しかし、世界情勢の推移、経済情況の変化にともない、現在では NDEA のスカラーシップも大幅に減少し、東洋学専攻の学生の門戸はせばめられ、州立大学での東洋学研究そのものがきびしい場面にさらされている。

『海外仏教研究』

〈指定研究〉

箕浦恵了研究員

First International Conference on Buddhism and National Cultures に出席

去る10月10日より15日までニューデリーにおいて表記の国際会議が開催された。哲学と宗教、儀礼方法と禅定、仏教建築と仏教美術、非暴力と平和などの各部会に分かれて多数の学者の研究発表が行われたが、箕浦教授にこの機会を通じて世界の仏教研究の動向についての情報・資料を集めて下さるようお願いした。なお、その報告は次号に掲載の予定である。

『真宗学事研究』
研究会報告

〈指定研究〉

真宗学事関係収集資料一覧

近世、近代における特に真宗教学を中心とした学事の動向に関する研究をその課題とする「真宗学事研究」は、研究活動と共に、その資料収集をも行ってきた。これまでは、主に大谷大学図書館に所蔵されている資料の収集作業を、経隆優嘱託研究員を中心に行ってきた。そして、それらの資料は、コピー複写、あるいはマイクロフィルム化して収集した。ここにその一部の資料を内容別に分類して一覧する。

学寮創設とされておる寛文5年まで遡っても凡そ320年余りになり、その間の学事関係資料は膨大な数にのぼるものと考えられる。しかし、この「真宗学事研究」は、発足して間がないため、未だそのうちのほんのわずかな資料の収集と整理ができたものとしかいいようがない。ここにその一覧を掲げたのは、今後の収集のために先学の諸先生に、ご教示願いたいからである。

＜凡　　例＞

収集した学事関係資料の中で古い年代のものを中心にしてここに掲げた。その為、書写本が多く、編著者名、書写年次等の不明な資料が多いが、下記にしめした記号数字のごとく、できうる限り記した。

（例）

資料名　　冊数、巻数

①……編著者名
②……発行所
③……発行年次
④写本……漢字、仮名等まじりの写本
漢写……漢字の写本
平写……仮名の写本
片写……カタカナ字の写本
刊本……活字、木版本等
なお、叢書類・雑誌類に収められているものは、その書名乃至誌名を記す。
※……註記

Ⅰ　学寮・大学制度関係資料　32点

学寮規則　1冊
④　片写本

学寮法則　1巻
④　写本
※　「往還寺由緒」所収。

学寮改正規約八條・法談規則
①　香山院龍温
④　片写本

宗規綱領並大学寮條規
③　明治17年
④　片写本

大学寮條規
①　大谷派本願寺寺務所文書科
②　大谷派本願寺寺務所文書科
③　明治19年
④　刊本
※　「本山報告」第10号付録。

高倉学寮諸規等類纂
④　写本
※　香山院龍温の手控を書写したもの。

高倉学寮諸條規並雑録　1巻
④　写本
※　「本山上檀古記録抜萃」所収。

高倉学寮諸規則　1巻
④　写本
※　「学寮諸規則」の別称あり。

高倉学寮諸制條　1巻
④　写本
高倉学寮歴年紀事　1巻
④　写本
※天明7年から寛政4年までの学寮記事。
高倉学寮記録
③　明治15年
④　写本
※　「御学寮要録」の別称あり。
学寮当番世俗雑記
④　平写
※　「住寮備忘」の別称あり。
澄海日記抜書　1巻
④　片写
※　「甲戌日記抜書」の別称があり、文化11年の学寮日記である。
貫練社開業式辞　1冊
①　香山院龍温（自筆）
③　明治13年
④　片写本
貫練場清規　1冊
①　香山院龍温（自筆）
④　片写本
貫練場改正規則稿　1冊
①　香山院龍温（自筆）
④　片写本
※　編集定規、本山会議定軌と合綴。
大谷派本黌沿革略
①　真宗典籍刊行会
②　真宗典籍刊行会
③　大正14年
④　『真宗大系』所収
真宗高倉学寮沿革誌　1巻
①　本山報告掛
④　片写本
真宗高倉大学寮沿革略　1巻
①　真宗高倉大学寮
②　真宗高倉大学寮
③　明治34年
④　片刊本
学事史料　2冊
※　明治6年から大正14年までの宗門教育機関への主要な令達事項を集綴したペン書本。
真宗大谷派宗門時言
①　大谷派本願寺文書科
②　大谷派本願寺文書科
③　明治33年
④　刊本
真宗大学廃滅の顚末
①　旧真宗大学丙申会
②　旧真宗大学丙申会
③　明治44年12月
④　『無尽燈』第16巻9号付録
夏安居温古　1冊
①　広陵了賢
②　大谷派安居事務局
③　昭和14年
④　刊本
※　昭和14年安居の副本。
大谷大学　1冊
①　大谷大学
②　大谷大学
③　昭和40年
④　刊本
※　「大谷大学300年のあゆみ」の内題あり。
真宗大谷大学一覧
①　真宗大谷大学
②　真宗大谷大学
③　明治34年～大正10年
④　刊本
大谷大学要覧
①　大谷大学
②　大谷大学
③　大正11年～昭和16年
④　刊本
配　紙
②　本山寺務所
③　明治4年～明治17年
④　刊本
本山報告
②　真宗大谷派本願寺寺務所文書科
③　明治18年～明治26年8月
④　刊本
本山事務報告
②　真宗大谷派本願寺寺務所文書科
③　明治26年9月～明治30年9月
④　刊本
常　葉
②　常葉社
③　明治30年10月～明治31年9月
④　刊本
宗　報
②　大谷派本願寺寺務所内宗報発行所
③　明治31年10月～大正13年

④ 刊本

真　宗

② 真宗大谷派宗務所

③ 大正14年～昭和59年10月

④ 刊本

Ⅱ 講者名簿・講義・典籍関係資料　31点

高倉学寮講者名寶録　1冊

④ 漢写本

高倉学寮三講者賓名録　1巻

④ 漢写本

三講者名実録

③ 明治15年

④ 漢写本

三講者名譜

① 真宗典籍刊行会

② 真宗典籍刊行会

③ 大正14年

④『真宗大系』所収

三講者名譜補遺

① 真宗典籍刊行会

② 真宗典籍刊行会

③ 昭和16年

④『続真宗大系』所収

学師奉願　1冊

③ 明治7年

④ 漢写本

擬講寮清規　1冊

① 香山院龍温

③ 明治6年

④ 漢写本

擬講選挙列名帳　1冊

① 香山院龍温

③ 明治4年

④ 漢写本

隷名記

③ 大正8年

④ 漢写本

※ 明和5年から文化10年までの円乗院宣明講師の社中名簿。

垂天結社簿

③ 大正4年

④ 漢写本

※ 香月院深励講師の社中名簿。

講本旧記　1巻

④ 漢写本

※ 宝暦5年から享和2年までの講義について記述。

年々講簿　1冊

④ 漢写本

※ 享和3年から明治6年までの講義名についての記述。

高倉学寮講者名並年々講簿

④ 片写本

※ 宝暦5年から明治14年までの講義名についての記録。

御学寮系譜並講本録　1巻

④ 写本

真宗大学寮講義年鑑　1冊

① 太藤順道

② 西村法蔵館

③ 明治25年

④ 刊本

学寮講義年鑑

① 真宗典籍刊行会

② 真宗典籍刊行会

③ 大正14年

④『真宗大系』所収

学寮講義年鑑補遺

① 真宗典籍刊行会

② 真宗典籍刊行会

③ 昭和16年

④『続真宗大系』所収

天保四年秋講当役日記

④ 写本

※「学寮記録」の別称あり。

近江学場履歴

① 蜂屋良潤

③ 明治27年

④ 片写本

真無量院殿並講者列伝

④ 漢写本

大谷派講者列伝附厳如上人傳

④ 写本

※「厳如上人履歴三講者列伝並碑文集」名の資料もあり、また「厳如宗主履歴大谷派講者列伝碑文集」の名で、『真宗全書』に所収されている。

浄土真宗教典志

④ 『大日本仏教全書』所収

真宗聖教刊行年表

① 禿氏祐祥、鷲尾教導

③ 大正5年

④ 『真宗全書』所収

大谷派先輩著述目録
① 住田智見
③ 大正14年
④ 『真宗大系』所収

大谷派先輩著述目録補遺
① 武田統一
③ 昭和16年
④ 『続真宗大系』所収

真宗学匠著述目録　1冊
① 井上哲雄
② 百華苑
③ 昭和５年
④ 刊本

古写古本真宗聖教現存目録　1冊
① 真宗本願寺派宗学院
② 永田文昌堂
③ 昭和51年
④ 刊本

越後無為信寺両講師（論文）
① 村上専精
③ 明治33年
④ 『無尽燈』第５巻第１号所収

真宗学匠拾遺（論文）
① 岡崎正謙
③ 昭和７年
④ 『大谷学報』第13巻第１、３号所収

真宗大谷派講者列伝（論文）
① 岡崎正謙
③ 昭和９年
④ 『大谷学報』第15巻第１、４号所収

妙音院了祥師並に其の学系調査報告（論文）
① 山田亮賢
③ 昭和12年
④ 『宗学研究』第14号所収

Ⅲ　人物・伝記関係資料　19点

超空師行状
① 安環
④ 『真宗全書』所収

円澄講師伝
① 松平秀雲
③ 寛保３年
④ 『真宗全書』所収

演澄年譜
① 演澄
④ 『真宗全書』所収

文化八年香月院引篭中記　1冊
④ 片写本

円乗院言行録　1冊
① 鹿野久恒
② 法蔵館
③ 昭和６年
④ 刊本

是海師実伝　2冊
① 清水是信
③ 大正７年
④ 刊本
※ 『南越是海全集』所収。

慧空老師行状記
① 慧暁
③ 享保７年
④ 漢写本
※ 義空の写本が善立寺に蔵されている。

慧空語隷
① 暁鳥　敏
② 無我山房
③ 明治42年
④ 刊本

開華院法住手記録
① 開華院法住
④ 写本

近代之儒僧公厳師の生涯と教学
① 佐々木求巳
② 立命館出版部
③ 昭和11年
④ 刊本

雲華上人遺稿
① 赤松文二郎
② 大分、後凋閣
③ 昭和８年
④ 刊本

信珠院丹山師略伝
① 岡崎正謙
② 破塵閣書房
③ 昭和８年
④ 『貫珠院遺稿』所収

貫珠院祐謙師行状
② 岡崎正謙
② 破塵閣書房
③ 昭和８年
④ 『貫珠院遺稿』所収

厳如上人御事績記
※ 厳如の事績を蒐集し、日記編年体に記されたもので東本願寺に原本が所蔵されている。

厳如上人御詳伝
① 本多良観
③ 刊本
小栗栖香頂略伝
① 小栗栖憲一
② 明治舘
③ 明治40年
④ 刊本
大谷大学職員履歴綴
※ 大谷大学企画課で大谷大学職員の履歴を表にまとめたもの。
西福寺慧敞講師の研究（論文）
① 桑谷観宇
② 本願寺宗学院
③ 昭和11年
④ 『宗学研究』第13号所収
学寮への動向と占部観順師の前半生（論文）
① 山崎法川
② 本願寺宗学院
③ 昭和17年3月
④ 『宗学研究』第24号所収

Ⅳ 異義関係資料 13点

異安心
① 中島覚亮
② 無我山房
③ 明治45年
④ 刊 本
異安心史の研究
① 水谷 寿
② 大雄閣
③ 昭和9年
④ 刊本
貞享行願記
③ 享保16年
④ 片 写
越後願生寺御法義御糺記録
④ 写本
※ 『粟津家記録』所収。
越後願生寺御法義御糺一件
④ 写本
※ 『粟津家記録』所収。
越後願生寺事件書 1巻
③ 大正2年
④ 平写本
越後願生寺事件記録
④ 写本
※ 『粟津家記録』所収。
越後御僉議ノ末寺控
④ 写 本
※ 『粟津家記録』所収。
越後書状留
④ 写本
※ 『粟津家記録』所収。
信越両国御僉議ノ末寺控
④ 写本
※ 『粟津家記録』所収。
越中照善寺異義事件書
④ 写本
※ 別称に「越中御教誡」とあり。
占部観順事件に就いて（論文）
① 水谷寿
② 本願寺宗学院
③ 昭和7年
④ 『宗学研究』第4号所収
正徳享保年間に於ける邪義者専福寺寛梯追放の顛末
① 本多主馬
② 本願寺宗学院
③ 昭和6年
④ 『宗学研究』第2号所収

Ⅴ 通史・関連諸記録関係資料 15点

大谷派本願寺誌 2巻
① 本山文書科
③ 明治28年
④ 刊本
※ 「本山寺誌」の別称あり。
大谷派本願寺誌 1巻
① 鈴木信雄
③ 明治34年
④ 片刊本
※ 「大谷寺誌」の別称あり。
本願寺誌要
① 本願寺誌要編輯局
③ 明治44年
④ 平刊本
真宗教学史
① 武田統一
② 平楽寺書店
③ 昭和19年
④ 刊本
明治仏教史
① 土屋詮教

② 三省堂
③ 昭和14年
④ 刊本

大谷派学事史
① 真宗典籍刊行会
② 真宗典籍刊行会
③ 昭和16年
④ 『続真宗大系』所収

大谷派学事史の研究
③ 昭和3年
④ 『大谷学報』第9巻第3号所収

東本願寺史料
① 宗学院編修部
② 宗学院
③ 昭和18年
④ 刊本

香月院講師寮日記　9冊
④ 平写本
※ 享和元年～文化10年までの学寮日記。

上首寮日記　5冊
④ 写本
※ 文政6年～明治5年までの上首寮の日記

御堂日記
④ 写本
※ 慶長5年から元禄12年までの本山における記録。

粟津日記
※本山の坊官職にあった粟津家の万治2年より明治元年までの記録日記。

草創期に於ける大谷派宗学の史的考察（論文）
① 岡崎正謙
② 本願寺宗学院
③ 昭和7年
④ 『宗学研究』第4号所収

普及時代の宗学界（論文）
① 岡崎正謙
② 本願寺宗学院
③ 昭和9年
④ 『宗学研究』第8号所収

真宗大谷派近代のあゆみ（論文）
① 松本専成
② 真宗大谷派宗務所
③ 昭和43年
④ 『真宗』2月号～12月号所収

研究所行事

真宗学事研究　研究会

2月以降の研究会は次の通りであった。

3月14日（水）「宗学の固定期及び新進期について」
本学助教授　鈴木幹雄氏

7月12日（木）「高倉学寮の組織について」
――学寮組織の変遷を中心に――
嘱託研究員　草野顕之氏

10月18日（木）「学事研究と門末教化」
嘱託研究員　木場明志氏

11月22日（木）「慧空年譜について」
嘱託研究員　経隆　優氏
研　究　員　大桑　斉氏

海外仏教研究　研究会

2月以降の研究会は次の通りであった。

2月29日（水）「最近のカトリックの仏教への関心」
嘱託研究員　リノ・ベリーニ氏
（本学講師）

5月29日（火）「フランスにおける仏教学研究」
Robert Duquenne 氏
（法宝義林研究員）

7月10日（火）「フランスにおける仏教学の現状」
嘱託研究員　ジャン-ノエル・ロベール
（フランス国立科学研究所主任研究員・高等学院講師）

10月25日（木）「像法決疑経について」
Dr. Whalen Lai
（Professor, University of California at Davis）

11月21日（水）「浄土教における臨終体験」
Dr. Carl Becker
（大阪大学フルブライト交換教授）

編集後記

昭和60年度「一般研究」の応募が今年度に順じた要領に基づいて実施された。10月末日をもって締め切られたが、本所報の発刊の頃にはすでに採用の決定がなされていよう。（片野）

研究所報　第11号
1984年12月10日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603　京都市北区小山上総町